

私の信仰

単元
8





来世への信仰

1. 来世への信仰とその重要性
2. 死と死後の復活
3. 人々が行ったことについての尋問
4. 天国と地獄
5. 死と死後についての誤った信条（輪廻転生）



単元について

この単元では、

- 神聖な教えであるイスラームの基本的信条の一つである来世への信仰について述べています。すべての生き物は必ず死を迎えます。死後、特に人間にはどのようなことが起こるのか、クルアーンで説明されています。
- 来世の存在を示す章句とハディースが取り上げられています。そして来世を信じることがもたらす人生に対する姿勢の変化について言及しています。
- 来世の生への過程で経験する墓、復活、集まり、魂、尋問、天国、地獄についての知識が挙げられています。一部の宗教や哲学で信じられているがイスラームの観点からは誤りである輪廻転生（生まれ変わり）についても述べています。

学習目標

この単元を終えたときには、下記の目標に到達することができます。

1. 死後に新しい生が始まることを知る。
2. 審判の日の重要性を説明する。
3. 死後に何が起こるか説明する。
4. 人がこの世界で行ったことの対価を来世で得ることを説明する。
5. 死に関する誤った信条には何があるか説明する。

学習時には

1. 単元の冒頭に掲げられた目標に到達できているかどうかを確認しましょう。到達できていない項目を再度読んでみましょう。
2. 単元の中で取り上げられている研究、考察は必ず実行してください。
3. 巻末にあげている文献の中で入手可能なものは読んでみてください。



「あなたがた信仰する者よ、アッラーとかれの使徒を信じなさい。また使徒に下された啓典と、以前に下された啓典を信じなさい。凡そアッラーを信じないで、天使たちと諸啓典とかれの使徒たち、そして終末の日を信じない者は、確かに遠く迷い去った者である」(婦人章第136節)

1

来世への信仰とその重要性



来世

人間が死後復活させられることによって始まり、終わりなく続く生を来世と呼びます。



「われは天と地、そしてその間にある凡てのものを、只真理に基づいて創造した。(審判の)時は本当に来ているのだ。だからあなたは情け深く寛容に(人びとの過失や欠点を)赦してやるがいい」(アル・ヒジュール章第85節)

来世の存在への信仰は義務とされている信仰の一つです。クルアーンの言葉から理解されるように、来世を信じることは人を正しく生きることへと方向づけます。来世を信じる人は、その信仰の要点である誤ったことをすれば罰を受け、正しく振る舞えばその対価を必ず得られることを知っているため、良い人間となるべく、できる限りの努力を払うようになるのです。



「かれらはアッラーと最後の日とを信じ、正しいことを命じ、邪悪なことを禁じ、互いに善事に競う。かれらは正しい者の類である」(イムラーン章第114節)

来世への信仰は、現世での生を意味のあるものとし、この信仰によって、人は何を行うにせよそれぞれに意味があり、そこから生じる結果があるという意識で行動することになります。特に、この世界で幸福になれず不当な扱いを受けてきた人々がその権利を取り戻せる日があることによって、彼らが不当な扱いを受け続けることや、そこから生じる精神的に窮迫し鬱積した状況となることから救われるのです。

来世への信仰は、現世において経済的に恵まれている人々に対しても、生活を規範あるものとし、手にしているものに対し責任を負い、それらを何のためにどのように使うべきかを考えるよう促します。

来世への信仰は、善悪を問わずあらゆる行いについて尋問を受けるという認識を強め、良いことを行い、悪事を避けるように人々を導きます。



「その日、人びとは分別された集団となって（地中から）進み出て、かれらの行ったことが示されるであろう。一微塵の重さでも、善を行った者はそれを見る。一微塵の重さでも、悪を行った者はそれを見る」（地震章第6-8節）

2

死と死後の復活



死は新たな始まり

イスラームにおいて死は無となることではなく、逆に新しい永遠の生への始まりです。

この世界に生きるすべての被造物は、いつか死にます。これについて崇高なるアッラーは「誰でも皆死を味わうのである」（イムラーン家章第185節）「地上にある万物は消滅する」（慈悲あまねく御方章第26節）と述べられています。

死から逃れることはできません。死の恐怖は人間を苦しめる最たるものの一つです。人々は死ぬことから、そして死の恐怖から救われることを求めてきました。しかし死は、対策を講じたところで遅らせることはできず、そこから逃れることもできないのです。

一方で不死への願いも、普遍的な心理の現実として私たちに影響を与えてきました。なぜなら生きたいという思いは、人間にとって最も深く強い欲求の一つであるからです。人間の死への恐怖は特に、死の本質がわからないこと、孤独、近親者を失うこと、人格を失うこと、死後に罪のために罰を受けること、後に人々を遺して逝く不安、無となること、そして大切に思ってきた人を失うことから生じるものです。

死と教訓

- 死は、ムスリムが教訓を得るべき事象です。なぜなら死は人間に、なぜ生きているのか、何をすべきか、どのようにすべきか、どのように振る舞うべきかを教えるものだからです。
- イスラームでは、死と生の意味は何であるのか、死後何が起こるのか、死はなぜあるのか、なぜ日々人が死んでいくのか、その理由を明白に説明しています。私たちの死に対する不安や疑念を取り除く知識を与えているのです。
- イスラームによると、死は無となることではなく、人がこの世界で行ったことの善し悪しが問われることであり、新しい生への始まりです。
- 死は、生きる次元が変わることです。死ははかない現世からの別離であり、永遠である来世に移ることです。
- 現世で善行に励んだ人、そして自分自身や社会、人々のために将来まで残るような良いことをした人にとって死は恐れるべきものではなく、行ってきたことの報奨を受ける新たな生への移行なのです。

死はすべての生命に遅かれ早かれ訪れます。そこから逃れることは不可能です。なぜならアッラーは、「言ってみよう。あなたがたが逃れようとする死は、必ずあなたがたを襲うのである。それから幽玄界と現象界を知っておられる御方に送り返され、かれはあなたがたに自分の所業を告げ知らせる」(合同礼拝章第8節)からです。

イスラームによると、来世を信じる人は死を恐れるべきではありません。アッラーと来世を信じない人だけが死を恐れるのです。なぜなら、そうした人々にとって死は無となることを意味するからです。ただし、どうせ死ぬのだからと現世を放棄し来世とだけ向き合うことは、ムスリムとして誤りです。クルアーンでは次のように述べられています。



「アッラーがあなたに与えられたもので、来世の住まいを請い求め、この世におけるあなたの(務むべき)部分を忘れてはなりません。そしてアッラーがあなたに善いものを与えられているように、あなたも善行をなし、地上において悪事に励んではなりません。本当にアッラーは悪事を行う者を御好みになりません」(物語章第77節)

現世のために励みつつも死を意識し忘れずにいることによって、人は現世において物事を深く考えて行動し良い行いをすることができるようになるのです。

魂

イスラームによると、魂は人間の体が創造された後で与えられます。その本質は人間には理解されていません。魂は神の命令の一つであるとされています。

「かれらは聖霊に就いてあなたに問うであろう。言ってみよう。聖霊は主の命令によ(って来)る。(人びとよ)あなたがたの授かった知識は微少に過ぎない」(夜の旅章第85節)



「それからかれ(人間)を均整にし、かれの聖霊を吹き込まれ、またあなたがたのために聴覚と視覚と心を受けられた御方。あなたがたはほとんど感謝もしない」(アッ・サジダ章第9節)

墓

人が死後、埋葬される場所を墓(カビール)と呼びます。そして審判の日までここにあります。墓地に眠る人々は来世の始まりと共に尋問のために甦らされます。



「その日、人びとは分別された集団となって（地中から）進み出て、かれらの行ったことが示されるであろう」（地震章第6節）

「本当に、（審判の）時はやって来る」（巡礼章第7節）

墓の上に石が置かれる

誰の庇護を受けることができるだろうか

父は息子を見ることができない、兄弟も兄弟を見ることはない

戻ることのない道をゆっくりと進む

キヤーマ（世界の終焉）

クルアーンは、この世界の終焉をキヤーマと呼びます。それがいつ起こるかはアッラー以外には誰も知りません。このことはクルアーンの以下の章句で示されています。



「天と地の大権、そしてその間の凡てのものが帰属する方、かれに祝福があるように。またかれの御許にだけ（審判の）時の知識はあり、われの御許にあなたがたは帰されるのである」（金の装飾章第85節）

ハシュル（復活）

世界の終わりの日、死者が甦り集められることをハシュルと呼びます。クルアーンは、人が死後復活し現世で行ったことについて問われ、真の裁きが行われると述べ、このことをハシュルと呼んでいます。



「だが誰でも、わが訓戒に背を向ける者は、生活が窮屈になり、また審判の日には盲目で甦らされるであろう」（ター・ハー章第124節）

マフシェル

世界の終焉の後、アッラーのお許しと定めにより、一定時間が過ぎると人々は甦らされ、一カ所に集められます。こうして新しい生を始めます。「見よ、かれらは目覚めて（地上に）現われる」（引き離すもの章第14節）

人々が死後、一斉に集められる場をマフシェル、その日のことをマフシェルの日と呼びます。

クルアーンではこの日がたいへん苦しいものであるとし、皆が自分のことだけで精いっぱいとな

り、最も近い人々であったとしても他者を気遣うことができない場として描いています。「やがて、（終末の）一声が高鳴り、人が自分の兄弟から逃れる日、自分の母や父や、また自分の妻や子女から（逃れる日）。その日誰もかれも自分のことで手いっぱい」（眉をひそめて章第33-37節）

アッラーを信じ、善行に励んだ人々は喜びにあふれます。クルアーンでは次のように示されています。



「（或る者たちの）顔は、その日輝き、笑い、且つ喜ぶ。」（眉をひそめて章第38-39節）

3

人々が行ったことについての尋問



尋問

この世界で知性と意志を持つ唯一の存在は、人間です。知性と意志を備えていることは、人間が責任を負っていることを意味します。他の生き物はそうした特性を持たないため、責任は負わせられていません。そして行ったことについて現世でも来世でも尋問を受けることはありません。しかし人間は、現世でのすべての行いについて来世で問われるのです。

子供と精神状態が正常ではない人は、自らの行為について責任を問われることはありません。「不義を行っていた者たち、その妻たち、またかれらがアッラーを差し置いて拝していたものたちを集めなさい。かれらを火獄への道に連れて行け。いや、かれらを待たせておけ。かれらに尋ねることがある」（整列者章第22-24節）

さらに人間は、この世界で与えられたすべての恵みについても責任を負います。すなわち、自分に与えられた体をどのように使ったか、自然の恵みに対する責任を果たしたか否かについて、そして他者に対する責任を果たしたかどうかについて問われます。



「その日あなたがたは、（現を抜かしていた）享楽に就いて、必ず問われるであろう」（蓄積章第1節）

裁き

マフシエルの場合では、私たちにはその本質を知ることのできない重大な裁きが行われます。この世界で思春期より後に死んだすべての人々が、たいへん厳正な裁きを受けます。この世界で行ったことについて問われ、行ったことの見返りをここで受け取るのです。

アッラーはこの裁きについて「それから審判の日に、あなたがたは主の御前で、論争す（ることになり裁きを受け）る」（集団章第31節）と示されています。そしてどのような些細なことでも善行を行った人はその結果を、悪いことを行った人もその結果を受けるということを次のように明示されています。



「一微塵の重さでも、善を行った者はそれを見る。一微塵の重さでも、悪を行った者はそれを見る」（地震章第7-8節）

またある節では、「あなたがたは、われが最初創ったように、今、正にわれの許に来た。いや、われがあなたがたに対し（会見の）約束を果たさないと、あなたがたは決めつけていた」（洞窟章第48節）と語られています。

預言者ムハンマドは審判の日について次のように説かれています。「人はその生涯をどこで費やしたか、財産をどこで得てどこで費やしたか、知っていることによってどのように行動したかについて裁かれることなくその場を離れることはない」（ティルミズィー、キヤーマ）

ミーザーン（秤）

マフシエル場で、人々の現世での行為は、はかられます。この基準によって善悪問わずすべての行為が最も微細な点に至るまで調べられ、正義と不正が明らかにされます。誰かが誰かに対し権利を持っていた場合、そのことを確定した後で、この世界で不当な扱いを受けた人々の権利がそれを行った人々から取り上げられます。不正を行った人はその罰を受けるのです。



「われは審判の日のために、公正な秤を設ける。1人として仮令芥子一粒の重さであっても不当に扱われることはない。われはそれを（計算に）持ち出す。われは清算者として万全である」（預言者章第47節）

裁きの結果として、すべての人々の善行と罪がはかられます。善行が悪事よりも勝っている人は喜び、悪事が善行に勝っている人は悲しむのです。



「それで、かれの秤が（善行で）重い者は、幸福で満ち足りて暮らすであろう。だが秤の軽い者は、奈落が、かれの里であろう。それが何であるかを、あなたに理解させるものは何か。（それは）焦熱（地獄）の火」（恐れ戦く章第6-11節）

ある日、高くはばたく心は疲弊し

ある日、ミーザーンのはかりが設けられる

ある日、皆の行ったことが問われる

主よ、こたえることができるだろうか

4

天国と地獄



イスラームでは、人が現世で行った良いことも悪いことも、見返りなく放置されることはありません。すべての人々は行ったことの対価として報奨もしくは罰を受けます。善行に励んだ人の報奨は天国であり、悪事を働いた人はその罰を地獄で受けます。

現世で善行に励んだ人々、アッラーのご満悦に適うことを行った人々、罪のない人々は、現世で幸せになるのと同様に死後には天国へ行き、そこで永遠の幸福を得ることができます。良いしもべはアッラーのすべての恵みを永遠に受けることができるのです。最大の恵み、最大の喜びが天国で与えられます。



「信仰して善行に勤む者たちには、かれらのために、川が下を流れる楽園に就いての吉報を伝えなさい。かれらはそこで、糧の果実を与えられる度に、「これはわたしたちが以前に与えられた物だ。」と言う。かれらには、それ程似たものが授けられる。また純潔な配偶者を授けられ、永遠にその中に住むのである」（雌牛章第25節）

天国では、すべての人々が同じ場所にいるのではなく、また同じ恵みを得るわけではありません。それぞれの居場所は这个世界でどれほどアッラーのご満悦を得たかによって定められます。「各人にはその行ったことに応じて、種々の等級があろう。あなたの主は、かれらの行ったことを見逃しにさせられない」（家畜章第132節）

現世でアッラーを否定し、アッラーの命じられたことを実践せず、罪を犯した人は、死後、罰せられ地獄に送られます。アッラーはクルアーンで次のようにおっしゃっています。「いや悪い行いを重ね、自分の罪で身動きが出来なくなるような者は皆、業火の住人である。その中に永遠に住むのである」（雌牛章第81節）

5

死と死後についての誤った信条（輪廻転生）



人間は、死後どうなるのかということに強い関心を持って生きてきました。死後については主に二つの見方があります。

- 一つ目の見解：死後、新たな生が始まる
- 二つ目の見解：人間を始め生き物が死ぬと、その魂は別の生き物の体に入って再びこの世界に戻ってくる

一つ目の見解では、死後に新たな生が始まります。この生を私たちは来世と呼びます。人は現世で行ったことを問われ、良いことを行った人は天国でその報奨を得ます。一方、自分や他の人々に害を及ぼした人、アッラーの命令に従わない人は地獄でその罰を受けます。イスラームの見解はこちらです。

ユダヤ教、キリスト教、ゾロアスター教もこれと同じ見解に立っています。これらの教えによると、人間はこの世界に一つの肉体として一度だけ訪れます。そして生きて死にます。再びこの世界に戻ってくることはないのです。新しい生は、来世で始まるのです。

輪廻転生（生まれ変わり）とは、死後魂が肉体を離れ、他の人間や動植物としてもう一度、もしくは繰り返し現世に戻ってくるものと定義されています。

この誤った信条で重視されているのは魂であり、肉体はただその衣装とされています。魂は現世に来るたびに、別の衣装をまとうというわけです。

何千年も前のインド哲学にまで遡ることのできるこの生まれ変わりの思想は、アジアで生まれたヒンズー教、仏教、ジャイナ教、シーク教などに見られる特徴です。輪廻転生はインドや中国を始めとし世界の一部の地域で今なお存続する信条です。

輪廻転生においては、人間以外のすべての存在が人間の肉体に到達するまで、様々な生を経ていかなければならないと信じられています。

イスラームの教えでは、魂は始まりのない存在ではありません。死によって肉体を離れた魂は再び現世に戻ることはなく、来世で肉体が復活すると再び肉体に戻ります。

輪廻転生が存在しないことを、クルアーンは次のように語っています。



「だが死が訪れると、かれらは言う。『主よ、わたしを（生に）送り帰して下さい。わたしが残してきたものに就いて善い行いをします。』決してそうではない。それはかれの口上に過ぎない。甦りの日まで、かれらの後ろには戻れない障壁がある」（信者たち章第99-100節）



単元のまとめ



人間の復活によって始まり、無限に続く時を来世と呼びます。この世界は始まりのない存在ではなく、いつかは終わります。この終焉をキヤーマと呼びます。

来世への信仰によって人は死後無にはならないことを知り、死が何であるかを認識することができます。特にこの世界で幸福になれず、不当な扱いを受けてきた人々がその権利を手にすることができる日があるということは、そのような人々を永遠に不当な扱いを受け続けること、そしてそこから生じる精神的な苦しみを強いられることから救います。

イスラームは、死への不安が不要なものであることを教え、死と生が何であるか、死後何が起こるか、死はなぜあるのか、なぜ日々人は死んでいくのかについて明白に説いています。死に対する私たちの不安や疑念を取り除く知識を与えているのです。

魂は、肉体とは別に、人の精神的側面を体現する力です。人間は死ぬと、肉体は墓に埋葬されます。一定の時間が経過すると復活させられ、マフシェルに集められ、そこで現世での行いについて裁きを受けます。

マフシェルでは、すべての人々の行いを計る公正な秤があり、これはミーザーンと呼ばれます。この秤により、誰かの権利がそのまま放置されることはないのです。良いしもべはアッラーのすべての恵みを永遠に受けることができます。最大の恵み、最大の喜びが天国で与えられます。現世でアッラーを否定し、アッラーの命じられたことを実践せず、罪を犯した人は死後、罰のために地獄に送られ焼かれます。イスラームを信仰したにもかかわらずアッラーに反抗した人が悔悟せずに死んだ場合、神の許しを得ることができなければ、罰を受けた後でその信仰への対価として天国に入ることができます。

輪廻転生は人間を始め生き物が死ぬと、その魂が別の生き物の体に入って再びこの世界に戻ってくるという誤った信条です。



単元の確認



1. 来世とは何でしょうか、説明してください。
2. 来世を信じることの効用を説明してください。
3. 死後、何が起きるか簡単に説明してください。
4. 輪廻転生とは何を意味しますか。それに対するイスラームの見解を説明してください。



確認のための質問



1. 下記の項目の中でどれが来世を信じることの効用に含まれませんか。

- A) 来世を信じる人は死の恐怖から救われる。
- B) 来世を信じる人は行動に気をつける。
- C) 来世を信じる人はなぜ創造されたかを知る。
- D) 来世を信じる人は死をより恐れる。
- E) 来世を信じる人はアッラーとのつながりを大切にする。

2. 下記の項目の中で死に関して誤りなのはどれでしょうか。

- A) すべての生き物は死を味わう。
- B) すべての生き物は死後、無となる。
- C) 死は、教訓を得るべき事象である。
- D) 死は、無限の生の始点である。
- E) 死は、無となることではない。

3. 下記の言葉の中で死後の生に関わりがないものはどれでしょうか。

- A) 地獄 B) マフシェル C) ミーザーン
- D) ムカーバラ E) 天国

4. 死後、人が裁きを受けるために集められる場の名は、下記の項目の中でどれでしょうか。

- A) ミーザーン B) マフシェル C) ハシユル
- D) 天国 E) 地獄

5. 下記の中でどの宗教に輪廻転生がありますか。

- A) イスラーム教 B) ユダヤ教 C) ヒンズー教
- D) ソロアスター教 E) キリスト教